

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32612

研究種目：学術変革領域研究(B)

研究期間：2020～2022

課題番号：20H05720

研究課題名（和文）托鉢修道会の司牧革命におけるメディアの総合的研究

研究課題名（英文）A02 Mendicant Orders Team: In-depth media research on the pastoral revolution by mendicant orders

研究代表者

赤江 雄一（Akae, Yuichi）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：50548253

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,000,000円

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトは、13世紀に誕生した、フランシスコ会とドミニコ会などの新形態の、いわゆる托鉢修道会に注目した。理念的には、俗人の司牧からは距離を置く観想的な修道制とは異なり、修道院の壁の外にでて、平信徒あるいは俗人に対して説教を行い聴罪を行う「司牧」を、自らの使命として積極的に携わった彼らの活動は、カトリック教会のその後の形を大きく定めることになる「司牧革命」の担い手であった。本プロジェクトは、大量言説普及装置としての説教、説教や学問などを支える書物の形態、書物に描かれた図像、壁画の制作と受容、俗語の宗教的著作などを、托鉢修道会が発達させた様々な「メディア」という観点から分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

托鉢修道会は複数の修道会をまとめた総称であり、通常はフランシスコ会、ドミニコ会などの個別の修道会の文脈内で論じられることが多い。しかし「托鉢修道会のメディア」という観点から、歴史学、美術史学、そして文学という各分野のメンバーがそれぞれの個別研究課題の検討を行うことで、説教、書物、図像、壁画などがいかに密接に関連していたかが明らかになった。13世紀以降三百年にわたって托鉢修道会が西ヨーロッパ社会で占めた位置を鑑みるならば、そして15世紀末以降ヨーロッパ外へ托鉢修道会がキリスト教を広げた力であったことを考えるならば、「托鉢修道会のメディア」とその影響力は、さらなる探究を要する研究対象である。

研究成果の概要（英文）：This project focuses on the mendicant orders, a new form of religious order that emerged in the 13th century, including the Franciscans and Dominicans. Unlike the contemplative monasticism, which in ideal terms distanced itself from the pastoral care of the laity, these friars actively engaged in their mission of 'pastoral care' outside the monastery walls, preaching and listening to laymen and laity, and were the leaders of the 'pastoral revolution'. This project analysed the various 'media' developed by the mendicant orders in terms of preaching as a mass discourse dissemination device, the forms of writing that supported preaching and scholarship, the iconography in books, the production and reception of wall paintings and religious writings in the secular language.

研究分野：ヨーロッパ中世史（宗教史）

キーワード：ヨーロッパ中世 托鉢修道会 メディア 写本 司牧革命 フランチェスコ会 ドミニコ会 書物

## 1. 研究開始当初の背景

12 世紀末までには、西ヨーロッパ社会は、スカンディナヴィアなどの周辺領域を除いては、王や族長の改宗などに特徴づけられる当初の「キリスト教化」の時期は過ぎ、人々のあいだにはキリスト教の典礼と慣習が定着していたと考えられる。しかし、13 世紀初め(1215 年)に開催された第四ラテラノ公会議は、すべてのキリスト教徒が少なくとも年に一度、司祭に自らの罪の告解をおこなうことをキリスト教史上初めて決議した。キリスト教化を個々人の内面にいたるまで推し進めようとする点で、同公会議の決議は画期的な意味をもち、それを実現する力として、托鉢修道会は設立され、その重要性を増していく。同公会議を招集した教皇インノケンティウス 3 世が、代表的托鉢修道会であるフランシスコ会とドミニコ会の設立に深く関わっていたのは偶然ではない。こうした動きは、C.モリスらによって「司牧革命」と呼ばれるほどである(C. Morris, *The Papal Monarchy*, 1985)。司牧革命は、異端的民衆宗教運動が叢生していた当時のカトリック世界の社会統合を教化を通じて目指すものだったといえる。

ダブレイは、13 世紀以降に出現する大量の説教写本の分析から、これらの写本は托鉢修道会士が著述・筆写したものであり、範例説教に基づいて説教が口頭で俗人に語られ、「活版印刷以前のマス・メディア」と言えるほどの規模で行われていたこと、そして説教の革新の中心地はパリであり、そこからヨーロッパ全体に広がったことを示した(D. L. d'Avray, *The Preaching of the Friars*, 1985)。説教以外にも教会美術や俗語文学など、托鉢修道会が俗人との接点として活用したメディアは多岐にわたる。美術の分野では托鉢修道会はビザンツの影響をカトリック世界に流し込んだ(A. Derbes & A. Neff, 'Italy, the Mendicant Orders and the Byzantine Sphere', in *Byzantium*, ed. by C. H. Evans, 2004)。また俗人を正統的信仰に教導するために、托鉢修道会では教育が重視され、大学にも進出することになる(Roest, *Franciscan Learning, Preaching and Mission, c.1220-1650*, 2015)。

以上の学問的背景から導かれる問いは、これらの説教、書物の形態、教育システムや教授法、ラテン語及び俗語で書かれたテキストなどは「托鉢修道会のメディア」として総体的に捉えられるのではないかと、いうものである。とくに重要なのは、それらの個別の特徴を捉えるだけでなく、それらがいかに関連していたか、という点である。

## 2. 研究の目的

本計画研究は、托鉢修道会が発達させた様々な「メディア」——具体的には説教、説教や学問など知的活動を支える書物の形態や書物の図像、教育とそれに対する態度、美術の制作と受容、そして俗語の宗教的著作——に注目し、13 世紀から 15 世紀にかけての各メディアの特徴のみならず、その相互連関を分析し、そうしたメディアが、当時の社会統合に果たした役割を検討することである。

## 3. 研究の方法

本研究の独自性は、托鉢修道会士たちの活動を「司牧革命」のメディアという観点から捉え、歴史学、美術史学、文学を専門とする研究者が密接に協働して総合的に考察する点にある。

本プロジェクトメンバーの構成とそれぞれの研究内容は以下の通りである。

赤江雄一(研究代表者、托鉢修道会の説教著述支援システム研究)  
駒田亜紀子(研究分担者、托鉢修道会の書物研究)  
原基晶(研究分担者、ダンテと托鉢修道会の俗語宗教詩研究)  
梶原洋一(研究分担者、托鉢修道会の教育研究)

荒木文果(研究分担者、初期イタリア・ルネサンス美術史、とくに托鉢修道会に関わる壁画の研究)

白川太郎(研究協力者、中世イタリアのフランシスコ会に連なる「預言者」研究)

#### 4. 研究成果

2020 年度は計画に沿って、上記のプロジェクトメンバーが各自の研究を進めた。コロナ禍の発生のため当初予定していた海外資料調査等の実施を断念せざるをえなかったが、一定の限界のなかで研究を進め、メンバー間でプロジェクトの趣旨を理解し、各自の研究対象に対する相互理解を深めるオンライン研究会を実施した。

2021 年度のオンラインでの研究会では、研究分担者の荒木文果が「ローマ、サント・スピリト病院《シクストゥス 4 世の生涯》壁画の特異性と二大托鉢修道会に関わる美術作品との関係について」と題する報告を行った。ローマのサント・スピリト病院の、教皇シクストゥス 4 世の生涯の逸話を中心に描いた 44 場面からなるフレスコ画連作壁画は、伝来する関連史料が乏しく、保存状態も悪いことから、美術史的な観点からの研究は困難を極めてきたが、この報告は、本壁画の視覚的な特徴として、装飾写本を思わせる画面構成、繰り返し登場する教皇の肖像の存在に注目し、同様の視覚効果を狙った美術作品が、ドメニコ会のローマ市街地における活動拠点であったミネルヴァ聖堂第一廻廊に確認されることを指摘した。さらに、この一致は、フランシスコ会士であった教皇のドミニコ会に対する競合意識と関連付けて考えうる可能性を初めて提言した。托鉢修道会の関わる複数の壁画間の照応、装飾写本と壁画との関連、複数の托鉢修道会のライバル意識などを巡り、活発な議論が交わされた。この研究内容は、翌 2022 年 7 月にイギリス・リーズ大学で開催された国際中世学会(International Medieval Congress)で報告された。また、原基晶が単著『ダンテ論—『神曲』と「個人」の出現』(青土社、2021 年)を公刊した。

2022 年度および繰越した 2023 年度の活動は以下の 4 点である。

- 1) 研究会を実施し、研究報告をもとに議論を行った。2022 年度には、白川太郎(研究協力者)の「14 世紀フランチェスコ会における預言者表象と司牧—マルゲリータ・ダ・コルトーナの『事績録』をめぐる問題」と題し、13 世紀以降のイタリア半島北中部に、その周囲から「聖人」とみなされるようになった隠修者・贖罪者・第三会士の一部に注目した報告を行い、研究会で検討を行った。これら「新しい聖人」への崇敬を管理したのは、多くの場合、托鉢修道会士であり、彼らが、典礼・説教・伝記といったメディアを通じて「新しい聖人」の記憶を担った。ほとんどの先行研究は、こうした活動を自立的な聖人崇敬の統制と捉え、修道会士が作成する伝記を、彼らのイデオロギーが反映されたプロパガンダとみなしてきたが、こうした「記憶の規範化」の典型例とされてきたマルゲリータ・ダ・コルトーナの『事績録』(14 世紀初頭に成立)を分析することで、このテキストがフランチェスコ会士たちに向けられた多くのメッセージを含んでいたことを指摘する。托鉢修道会士が伝達者であると同時に受容者でもある点に注目する本プロジェクトの視点を深める成果であり、後述の最終刊行物にも反映された。  
また、2023 年度には駒田亜紀子(研究分担者)が「13 世紀パリにおける彩飾写本レパートリーの多様化と托鉢修道会」という報告を研究会で行った。13 世紀のパリにおいて、小型一巻本聖書および複数巻構成の註解付聖書の普及、13 世紀第 3 四半期の法学書や自然哲学書の台頭、そして聖書や法学書の俗語(仏語)訳の出現などの、彩飾写本のレパートリーの多様化が進んでいた。これらの変容には托鉢修道会の関与が推測されるものの、現存写本からそれを直接に裏付けることは容易ではない。美術史的コンテクストの中で論じられてきたこれらの写本を、托鉢修道会のメディアという見地から、多角的に検討した。  
加えて、ゲストとして桑原夏子(早稲田大学高等研究所)を合同研究会に招き、公刊されたばかりの著書『聖母の晩年—中世・ルネサンス期イタリアにおける図像の系譜』を巡って、本研究プロジェクトの観点から議論する機会を得て、今後の更なる研究への示唆を得た。
- 2) 2022 年度のワークショップ「ラテン・キリスト教と日本仏教における「もつれた修道制史」を目指して」および 2023 年度の国際カンファレンス Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia への参加。
- 3) 本プロジェクトの最終成果物としての英語論文集 Pastoral Care and Monasticism in Latin Christianity and Japanese Buddhism (ca. 800-1650) (LIT Verlag, 2024) と日本語論文集『修道制と中世書物—メディアの比較宗教史に向けて』(八坂書房、2024 年)に本研究班メンバーが論文を寄稿した。前者には、赤江雄一(研究代表者)が総説および「From Preaching to Written Treatises: Choice of Genres in Pastoral Expositions by John Waldeby OESA」、後者には梶原洋一(研究分担者)の「托鉢修道会のアイデンティティと書物」、荒木文果「『キリストの生涯』についての黙想」をめぐる二大托鉢修道会のイメージ戦略」、白川太郎(研究協力者)「聖マルゲリータ・ダ・コルトーナをめぐる記憶の政治と書物—13-14 世紀転換期におけるフラン

チェスコ会・イタリア都市・聖人崇敬」である。

- 4) 本研究プロジェクトとの関連での研究成果の公刊。特に梶原洋一の欧文単著 *Du frère au maître. Les dominicains de France face au système universitaire des grades au Moyen Âge* (Paris, Cerf, 2022) など。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 赤江雄一	4. 巻 15
2. 論文標題 「感情の共同体」としての学識ある聖職者 14世紀の説教の聴衆」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『西洋中世研究』	6. 最初と最後の頁 6-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原 基晶	4. 巻 32
2. 論文標題 「ダンテとは誰なのか 『神曲』 解釈の第一歩として」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『文明』（東海大学文明研究所）	6. 最初と最後の頁 89-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒木 文果	4. 巻 36
2. 論文標題 Filippino Lippi in the Brancacci Chapel	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要『人文科学』	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 梶原 洋一	4. 巻 1012
2. 論文標題 中世ドミニコ会における修学のための移動	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『歴史学研究』	6. 最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 駒田 亜紀子	4. 巻 36
2. 論文標題 『十三世紀フランス語聖書』(Bible française du XIIIe siècle)彩飾写本研究:オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館所蔵《新約聖書》におけるヨハネ伝挿絵について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『実践女子大学美術美術史学』	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 白川 太郎	4. 巻 271
2. 論文標題 「グリエルマとマイフレダの異端:13世紀末ミラノにおける信仰・政治・社会」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『西洋史学』	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白川 太郎	4. 巻 13
2. 論文標題 「故郷における預言者:キアラ・ダ・モンテファルコをめぐる崇敬・対立・権力」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『西洋中世研究』	6. 最初と最後の頁 79-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白川 太郎	4. 巻 43
2. 論文標題 「アポストリ研究の諸前提:史料論と研究史」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『西洋史論叢』	6. 最初と最後の頁 73-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 赤江 雄一	4. 巻 89 (1-2)
2. 論文標題 「環境史の鍵概念としての主観性と史料探索の今」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『史学』	6. 最初と最後の頁 137-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荒木 文果	4. 巻 36
2. 論文標題 'Filippino Lippi in the Brancacci Chapel'	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梶原 洋一	4. 巻 1012
2. 論文標題 「中世ドミニコ会における修学のための移動」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『歴史学研究』	6. 最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 駒田亜紀子	4. 巻 36
2. 論文標題 『十三世紀フランス語聖書』彩飾写本研究: オクスフォード、クライスト・チャーチ図書館所蔵《新約聖書》におけるヨハネ伝挿絵について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『実践女子大学美術学』	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 白川太郎	4. 巻 184
2. 論文標題 「福音的イタリア」とリソルジメント:自由主義期のヴァルド派牧師エミリオ・コンバとその歴史叙述」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『史観』	6. 最初と最後の頁 72-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計27件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 赤江 雄一
2. 発表標題 後藤里菜『 叫び の中世:キリスト教世界における救い・罪・靈性』評
3. 学会等名 ヨーロッパ中世史研究会 (REN)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 荒木 文果
2. 発表標題 マルチバースと美術史学の親和性
3. 学会等名 石井・石橋飢饉 2023 第一回研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 荒木 文果
2. 発表標題 永遠の都 ローマ展
3. 学会等名 福岡日伊協会主催セミナー (福岡市美術館)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 梶原 洋一
2. 発表標題 中世ヨーロッパの托鉢修道会と大学学位：ドミニコ会とフランシスコ会
3. 学会等名 関西比較中世都市研究会（大阪市立大学）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 梶原 洋一
2. 発表標題 学歴社会の誕生？ 中世における大学とドミニコ会
3. 学会等名 東京日仏会館講演
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 原 基晶
2. 発表標題 ダンテ研究の今：人生・テキスト・解釈（没後700周年の後で）
3. 学会等名 日本中世英語英文学会研究助成セミナー
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 原 基晶
2. 発表標題 「ダンテとは誰なのか 『神曲』 解釈の第一歩として
3. 学会等名 「知のフロンティア」シンポジウム「文化知と学問」（東海大学）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 白川 太郎
2. 発表標題 Clare of Montefalco and her Pastoral Activities
3. 学会等名 Workshop KU-Leuven - Waseda University
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 白川 太郎
2. 発表標題 Pescatori piu utili delle anime: Le missioni francescane nella legenda di Margherita da Cortona
3. 学会等名 Conferenza in intermediazione culturale e religiosa
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 白川 太郎
2. 発表標題 「最も有益な魂の漁師」？ コルトーナにおけるフランチェスコ会士・預言者・司牧革命
3. 学会等名 第9回西洋史読書会大会（京都大学）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 赤江 雄一
2. 発表標題 問題ある説教者としての教皇ヨハネス22世 至福直観論争の別側面 」
3. 学会等名 三田史学会2021年度大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶原 洋一
2. 発表標題 大学学位をめぐる中世ドミニコ会のジレンマ
3. 学会等名 関西中世史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 荒木 文果
2. 発表標題 巨大な装飾写本:ローマ、サント・スピリト・イン・サッシア病院「教皇シクストゥス4世の生涯」の壁画におけるフランシスコ修道会美術の影響について
3. 学会等名 ReMo研シンポジウム2021: 東西中世における修道院・寺社の書物文化 制作・教育・世界観の変容, 東京都立大学
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶原 洋一
2. 発表標題 托鉢修道会のアイデンティティと書物
3. 学会等名 ReMo研シンポジウム2021: 東西中世における修道院・寺社の書物文化 制作・教育・世界観の変容, 東京都立大学
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白川太郎 Taro Shirakawa
2. 発表標題 Nemo propheta in patria: Chiara da Montefalco tra venerazione e critiche
3. 学会等名 "Incontro: Storia della chiesa e delle eresie medievali, Universita degli Studi di Firenze (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白川太郎
2. 発表標題 後期中世スポレート渓谷における神秘体験者：キアラ・ダ・モンテファルコをめぐる崇敬と対立
3. 学会等名 第71回日本西洋史学会、武蔵大学（オンライン開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白川太郎
2. 発表標題 「心臓の奇跡」を超えて：預言者キアラ・ダ・モンテファルコと後期中世イタリアの信仰文化
3. 学会等名 イタリア史研究会 2021年度7月例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白川太郎
2. 発表標題 宗派史から国民史へ？ 19世紀ヴァルド派の歴史叙述とそのイタリア化
3. 学会等名 第1回早稲田大学ナショナリズム・エスニシティ研究所若手研究者研究発表会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白川太郎
2. 発表標題 19世紀ヴァルド派の「イタリア化」と歴史叙述：牧師エミーリオ・コンバと福音的イタリアの系譜論
3. 学会等名 歴史論研究会第9回関東部会例会、オンライン、2021年 9月23日
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白川太郎
2. 発表標題 預言者の到来：14世紀初頭エミリア地方のアポストリ・ネットワーク
3. 学会等名 2021年度早稲田大学史学会、オンライン
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白川太郎
2. 発表標題 自由主義期ヴァルド派の国民史と信仰改革論：牧師エミリオ・コンバと福音的イタリアの系譜論
3. 学会等名 イタリア近現代史研究会例会、オンライン
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白川太郎
2. 発表標題 14世紀初頭コルトーナにおける守護聖人崇敬の形成：聖マルゲリータの『事績録』における都市と托鉢修道会
3. 学会等名 ReMo研シンポジウム2021：東西中世における修道院・寺社の書物文化 制作・教育・世界観の変容，東京都立大学
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 赤江雄一
2. 発表標題 「問題ある説教者としての教皇ヨハネス22世 至福直観論争の別側面」
3. 学会等名 三田史学会 2021 年度大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶原洋一
2. 発表標題 「大学学位をめぐる中世ドミニコ会のジレンマ」
3. 学会等名 関西中世史研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白川太郎
2. 発表標題 「グリエルマとマイフレダ：13世紀末ミラノにおける信仰・聖人・異端」
3. 学会等名 ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所第27回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 白川太郎
2. 発表標題 “Nemo propheta in patria: Chiara da Montefalco tra venerazione e critiche”
3. 学会等名 Incontro: Storia della chiesa e delle eresie medievali, Università degli Studi di Firenze (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 白川太郎
2. 発表標題 「後期中世スポレート渓谷における神秘体験者：キアラ・ダ・モンテファルコをめぐる崇敬と対立」
3. 学会等名 第71回日本西洋史学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計15件

1. 著者名 梶原 洋一 Yoichi Kajiwara	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Cerf	5. 総ページ数 548
3. 書名 Du frere au maistre. Les dominicains de France face au systeme universitaire des grades au Moyen Age	

1. 著者名 大貫俊夫/赤江雄一/武田和久/苅米一志編, 梶原洋一/荒木文果/白川太郎著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 八坂書房	5. 総ページ数 416
3. 書名 『修道制と中世書物』	

1. 著者名 Toshio Ohnuki, Gert Melville, Yuichi Akae, and Kazuhisa Takeda (eds)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 LIT	5. 総ページ数 280
3. 書名 Pastoral Care and Monasticism in Latin Christianity and Japanese Buddhism (ca. 800-1650)	

1. 著者名 徳永聡子編, 赤江雄一著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 240
3. 書名 『神・自然・人間の時間：古代・中近世のときを見つめて』	

1. 著者名 荒木 文果 他	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ありな書房	5. 総ページ数 432
3. 書名 『迷宮のアルストピア 新しきイマジナリアを求めて』	

1. 著者名 駒田亜紀子監修	4. 発行年 2024年
2. 出版社 国立西洋美術館	5. 総ページ数 94
3. 書名 『文字と絵の小宇宙 国立西洋美術館 内藤コレクション写本リーフ作品集』	

1. 著者名 森原 隆編, 白川太郎著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 成文堂	5. 総ページ数 356
3. 書名 『ヨーロッパの「統合」の再検討』	

1. 著者名 原基晶	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 320
3. 書名 ダンテ論	

1. 著者名 赤江雄一（岩波敦子との共編著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 246
3. 書名 中世ヨーロッパの「伝統」--テキストの生成と運動（分担：「はじめに」、 「西洋中世における説教術書の伝統生成 説教術書は制度的ジャンルか」、1-35頁）	

1. 著者名 白川太郎（分担執筆）、 甚野尚志編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 364
3. 書名 疫病・終末・再生--中近世キリスト教世界に学ぶ（担当：「預言者に従う人々：13-14世紀転換期エミリア地方における終末待望とアポストリの変容」、71-95頁）	

1. 著者名 梶原 洋一（分担執筆）、高山博、亀長洋子編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 648
3. 書名 中世ヨーロッパの政治的結合体（担当：「中世ドミニコ会統治における総会と総長--大学学位の問題を通じて--」、383-402頁）	

1. 著者名 原 基晶	4. 発行年 2021年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 353
3. 書名 『ダンテ論 『神曲』と「個人」の出現』	

1. 著者名 赤江雄一・岩波敦子編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 237
3. 書名 『中世ヨーロッパの伝統 テクストの生成と運動』	

1. 著者名 高山博・亀長洋子編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 627
3. 書名 『中世ヨーロッパの政治的結合体』	

1. 著者名 鈴木董編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 372
3. 書名 『侠の歴史：西洋編上+中東編』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

A02 托鉢修道会班 托鉢修道会の司牧革命におけるメディアの総合的研究 <a href="https://religious-movements.com/members/a02/">https://religious-movements.com/members/a02/</a> ReMo研 <a href="https://religious-movements.com/">https://religious-movements.com/</a>
--

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	駒田 亜紀子  (Komada Akiko)  (00403866)	実践女子大学・文学部・教授    (32618)	
研究分担者	荒木 文果  (Araki Fumika)  (40768800)	慶應義塾大学・理工学部(日吉)・講師    (32612)	
研究分担者	原 基晶  (Hara Motoaki)  (50412218)	東海大学・文化社会学部・准教授    (32644)	
研究分担者	梶原 洋一  (Kajiwara Yoichi)  (50844552)	京都産業大学・文化学部・助教    (34304)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	白川 太郎  (Shirakawa Taro)  (90978701)	早稲田大学・文学学術院・助手    (32689)	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 国際カンファレンス"Transcending the Tangibility and Intangibility: Religion and Media in Pre-Modern East and West Eurasia"	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 International Medieval Congress 2022 session "Transcending and Constructing Religious Spaces: Pilgrimage in Medieval Japan and Europe"	開催年 2022年～2022年

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

ドイツ	ドレスデン工科大学			
英国	リーズ大学			
ベルギー	ヘント大学			